

～黒柳召波の句・・

蕪村が召波に言った言葉がある

「俳諧に門戸なし俳諧門といふを以て門とす」

詩にあらず錦にあらず機の蠅

蠅は金色や緑色にひかってまさにそれだけ見れば錦の織物である。それが機織り機にとまっていた。疎ましき蠅は色美しくても詩にはあらず錦の織物でもない。洒落た滑稽味がある。

花踏て戻る公卿の草履哉

この句の季語は散り敷いた花びらであるが公卿の草履が句の中心に据えられている。無造作に踏みつける公卿の草履の方がこの句の中では威張っている可笑しさ。

花踏て戻る公卿の草履哉

おそらく酒席であろう。刺身に添えられたわさびのあまりの辛さに涙しているのである。